

巻頭エッセイ

WODCON（世界浚渫会議）と ヨーロッパ企業の戦略



矢野州芳

三菱重工業株式会社 船舶技術部 主席技師

本号はWODCON特集ということなので最近のWODCONの動向とヨーロッパ企業の戦略について私見を述べたいと思います。と言うのは、最近WODCONはヨーロッパ企業の戦略の道具として利用されていると強く感じるからです。

私が初めてWODCONに参加したのは1995年第14回アムステルダム大会でした。その後、2001年の第16回クアラルンプール、2004年の第17回ハンブルグ、そして今年の第18回オランダと合計4回、欧州・アジア・米国地区で開催されたWODCONに参加することができましたが、ここ10年間で注目すべき動きと言うと“環境問題”と“中国の台頭”と言う2つの大きな流れがあります。

“環境問題”については、1990年にヨーロッパの浚渫業界と政府機関がESC（Environmental Steering Committee、環境問題運営委員会）を立ち上げてWODCONを通じて活発に活動しています。1995年の第14回アムステルダム大会では環境問題についての論文発表が急増し、「環境の日」が設けられてパネルディスカッションが行われた等、WODCONは環境色を一気に強めていきます。そして2004年第17回ハンブルグ（大会テーマは“Dredging in a sensitive environment”）は正に環境問題一色の大会となりました。この間、私は2002年にベネチアで開催された第27回ESCにヨーロッパからの要請でアジアから初めてオブザーバーとして参加する機会を得ました。地中海の小島にポツンと建つ中世の城で開催されたこの会議に最初はロマンチックな気分が臨んだのですが、一旦会議が始まるとムードは一変、ロンドン条約やオスロ・パリ条約の環境問題による浚渫規制やグリーンピース等の環境団体による浚渫工事差し止め要求等に対して業界を上げて対抗していこうとする強い意気込みと気概を感じる決起大会の様相となりました。ヨーロッパ企業が凄と思うのは、彼らの利益擁護の為には国際条約の環境基準・規制案をも軌道修正させようと世界中を巻き込んで活動し、自ら世界標準を作り出そうとするエネルギーがあることです。実際、2003年にESCは浚渫

環境問題に関するガイダンスを作成し、この年の11月に上海で開催された第1回中国国際浚渫会議で発表しています。WODCONが急に環境問題一色になったのは、ヨーロッパ企業がWODCONを利用して世界各国を懐柔し、彼らの環境問題のガイダンスを世界標準にしようとする戦略だったと言う気がしています。このような傲慢とも思える戦略は控え目で謙虚な日本人にはとても真似のできないことのように思えます。

もう1つの大きな流れである“中国の台頭”については、1995年の第17回ハンブルグ大会で嫌と言うほど実感させられました。それまでは影すら見えなかった中国が突如として表舞台に踊り出てスポットライトを浴びた感じでその急激な変化に驚くと共にヨーロッパの見事な演出に感心しました。この大会以降回を重ねるごとに中国の存在感は急速に増大しています。これは中国の舞台裏での努力も然る事ながら、ヨーロッパが世界最大の浚渫市場である中国を取り込もうとあからさまな中国寄りの戦略を展開したからでしょう。WODCONでのヨーロッパの中国に対する気の使い方は尋常ではなかった。このようなヨーロッパの強かな戦略には本当に見習うべき点が多いと思います。造船業に長年身を置きヨーロッパ企業と戦っていると、日本との差がどうしても目に付きます、相手国の政策に通じ、柔軟に数多くの変化球を繰り出すヨーロッパと直球一本槍の日本と大きな戦略の差を感じざるを得ません。

以上2つの事例に共通してその底流にあることは、ヨーロッパは国と企業が情報を共有し一体感を持って共通の利益のために動いていると言うことではないでしょうか。ヨーロッパ企業の背後にはいつも守護神のように国の存在が感じられます。一方、我が国の現状は国と業界が仲良く協力し合うことは「悪」と見なされ、とても情報を共有し一体感を持てる状況にはありません。国と企業が背を向け合って離れて行こうとしているかのようで、これでは日本は何時まで経ってもヨーロッパの後塵を拝することになるという気がしてなりません。